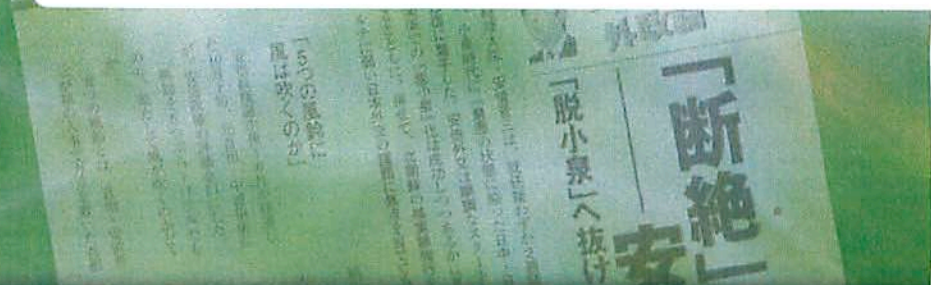


時事ニュースJanet・世界週報

政権交代II

「小泉」から「安倍」へ、日本外交の今

●主要資料付



●時事通信社「時事ニュースJanet」「世界週報」連載
2006.1～2006.11

時事通信解説委員 鈴木美勝 著



Jiji Press On Demand Booklet

No.17

第7回

Date.06.7.25



左から順に、グレースランドでプレスリーのまねをして踊る小泉首相、プレスリーの元夫人のプリシラさん、娘のマリーさん、ブッシュ大統領（肩書きは当時）

小泉プレスリーにかき消された日米「新同盟」

総理大臣・小泉純一郎は、6月末の米国訪問をもって「小泉・ブッシュ蜜月ショー」のフィナーレを飾った。ロックンロールの王様、エルビス・プレスリーで味付けされた訪米日程。大衆力を政治基盤とし、小泉らしい手法で5年余の対米首脳外交に区切りを付けたが、今回の訪米は同時に、ポスト小泉に向けた日米関係への第一歩であったことも忘れてはならない。

新たに注入された「新世紀の日米同盟」の理念とコンテンツ。そこからは、将来を見据えた日米関係を暗示する重要な方向性が読み取れる。「小泉・ブッシュ」体制の5年余は、両国が、底なしに「融合」を始めた時代の転換点として、日米関係史に刻まれることになるかもしれない。

（敬称略）

破格の待遇、首相・小泉の絶頂

異例づくめの首相訪米だった。

2006年6月29日、日米首脳会談後の共同記者会見――。

冒頭、米大統領ブッシュが記者団に、プレスリーの歌に引っ掛けてジョークを飛ばした。「小泉首相に『冷たくしないで』」。それに応えるように、プレスリー・ファンの小泉が会見を締めくくった。

「Thank you very much American people for “Love me tender” (アメリカ国民の皆さんに感謝しております、優しく愛してくれて大変ありがとうございます)」

その晩は、ブッシュが小泉のためにステートディナーを主催した。歴代の大統領なら頻繁に開くステートディナーだが、ブラックタイ嫌いのブッシュの場合、在任6年余でわずか6回、小泉が7人目のゲストだ。

加えてキャンプデービッド (2001年6月)、ブッシュの自宅テキサス州・クロフォード (03年5月) への訪問と合わせると、今回のホワイトハウスへの公式訪問によって、小泉は各国首脳の中でただ一人“グラント・スラマー”となった。

翌日は、大統領専用機に日本の首相として初めて同乗するという超VIP待遇で、テネシー州メンフィスへ。大統領夫妻直々の案内でプレスリー旧邸宅「グレースランド」を訪問した。

誕生日がプレスリーと同じ (1月8日) である小泉の「訪米ショー」のクライマックスが、テレビを通じて日本にも流れた。

ワイドショーのリポーターが、ワシントンから米メディアの報道ぶりを紹介する。

グレースランドで“熱唱”する小泉プレスリーの姿は、ワシントン・ポスト紙の一面を飾り、同紙テレビ欄は「グレースランドでのカラオケ外交」の見出しで記事を掲載。そしてリポーターは付け加えた。「米国テレビでは、サングラスをかけ、プレスリーの曲を歌う小泉総理がどこでも流されていました」

米国メディアがこぞって強い関心を示したのは、日米首脳会談の中身よりも、むしろ小泉プレスリーのパフォーマンス。プライムミニスター・コイズミは、歴代日本人首相の誰よりも、米国民に幅広く、かつ大衆の裾野にまで名前が知られた首相として、知日派の間で語り継がれるだろう。日米「密月」関係を共に演出し支え合った、最も気の合うテキサス・カウボーイ、米大統領ジョージ・ブッシュの名とともに。

首脳外交が途切れ、不正常な状態の対中、対韓関係を半ば放置したまま、

「レースランドで訪米を締めくくった首相・小泉。「小泉・ブッシュ劇場」最終章となった今回の訪米については、元首相・中曽根康弘が、単なる「社交外交」の域を出なかったと手厳しく批判する。「彼は社交外交が得意だが、(サプライズのみを狙ったり)自分の好きな国だけを訪問する“つまみ食い外交”をやっているだけ」

ビジョンなき、戦略なき小泉外交を喝破した中曽根の批判は確かに鋭い。

だが、小泉が繰り出すパフォーマンス外交、そして日米双方のテレビメディアに受けた今回の訪米は、政治、経済、文化、マスコミ、国民を含む日米関係の総体を反映しているように見えた。

「日米融合」への序章なのか

カナダ訪問を終えた首相・小泉がワシントン入りし、市内のプレアハウスに腰を落ち着けた頃、日米関係の現状を反映したような示唆に富む会合が開かれた。

東京・六本木ヒルズタワー 51階にある「六本木ヒルズクラブ」――。

在日米商工会議所 (ACCJ) 主催のセミナーで、日本ビジネスにおける涉外活動の実情、意味合いが討論された。

米金融アナリスト、ハイテク産業、医薬品業界などのアメリカ人ビジネスマンばかりでなく、駐日米大使館関係者らを含めて約70人が出席、耳を傾け、活発な質疑応答が展開された。

例えば、日本に「gaiatsu (外圧)」はまだ必要なのか否か。

東京で活躍するビジネスコンサルタント、キース・ヘンリーは明言する。「昔前と違って、今では不要だと思いますよ」

外資系企業側に立って涉外活動を手助けし、日本の商慣習、慣行に則ってビジネス展開を支援する。「10年前までなら、こんなビジネスは成り立たなかった」が、3、4年前から、事情は違ってきた。

かつては、政府 (大使館) に頼り、「外圧」によって日本側の扉をこじ

開けようとしてきた外資系企業も、日本のビジネス文化に合わせながら、中に入り込む術を学んできた。霞が関に働き掛けたり、情報を収集する場合も、摩擦が起こる手法は選ばない。

貿易摩擦問題が賑やかなりし頃の1980、90年代には考えられなかった手法——大使館よりも、独自に見いだした人材（文化に柔軟に対応でき、文化を利用できるアメリカ人）

によって日本側との接点を時間をかけて探る。これこそが、日本の中に入り込む渉外術と言えるのだ。

90年代初頭の駐日米大使・アマコスト（当時）はミスター・ガイアツと呼ばれたが、最早、外圧手法は日本には効果的でないし、通用しないというわけだ。

片や日本側にも、弱肉強食を公然と容認し、アメリカンスタイルを信奉するビジネスマンも、続々現れ始めている。

経済分野では、アメリカが拡大・浸透させたグローバリズムの波によって、日米間の障壁が倒壊、ビジネスにおける国境は消滅しつつある。グローバリズムが押し寄せた経済領域では、日米相互のビジネス文化、企業文化が「融合（フュージョン）」する時代となった。

スポーツ、エンターテインメント・カルチャーといった大衆文化や食文化では、かなり以前から、「融合」が進行。日本の鮭が米国でブームとなり、sushiとなって以来、多様な「スシ」を生み出してきた彼の地は、即ち各種文化fusion（融合）の本場、ニューヨーク。そしてポップカルチャーも然りだ。



大統領専用機「エアフォースワン」に乗り込む前に手を振る小泉首相(右)とブッシュ大統領夫妻(阿書きは当時)

「奥の院」に入り込む「内圧」時代の主役

異文化が接触する時、そのどちらの文化が融合の核となるかは様々。だが、人々に何ら抵抗感なく、あるいは違和感なく受け入れられれば、一つの進化と呼べる。アメリカの国技とも言えるベースボールが日本に根付き、野球という形で独自のスタイルを作り出し、イチローの逆輸入によって大リーグが衝撃を受けたのも、融合のバリエーションの一つだろう。

国家と国家の間には、文化レベルで様々な相互作用があり、国民の意識、対外イメージに大きな影響を及ぼす。その意味で、例えば小泉プレスリーの大膽なパフォーマンスは、日本という国のイメージ、存在感を違和感なく米国民の意識に溶け込ませた。

また、外交・政治レベルの融合は、国益が絡むだけに、経済分野の融合のように易々とはいかない。だが、“政治的国境”を自由に往来するアメリカ人は既に出現している。

例えば、昨年末までプッシュ政権の対日関係を取り仕切っていたマイケル・グリーン（P18参照）（米戦略国際問題研究所日本部長、ジョージタウン大準教授）は、流暢な日本語と人懐こい性格を武器に、日本政界の「奥の院」にまで易々と入り込んでいる。とりわけグリーンの場合、ワシントンの権力やパワーエリートたちと分かち難く結び付いているだけに、日本の政治にプレッシャーをかけられる立場にある。

例えば、自民、民主を問わず、中堅、若手の政治家に幅広い人脈を持つグリーンだが、日本人の対米コンプレックス、あるいは米国通を気取った優越感を巧みに利用しているとも言える。永田町、霞が関には、「昨日は、マイケル・グリーンが電話をかけてきてね」と自慢げに話す閣僚すらいるのを考慮すると、グリーン永田町への影響力を決して見逃すことはできない。

さらにポスト小泉の一番手、官房長官・安倍晋三とは来日のたびに接触しているし、安倍を追う元官房長官・福田康夫とは言えば、旧知の仲。

まんまと永田町のインサイドに入り込み、情報収集したり、ワシントンの意向を伝えたりするのだから、簡単に「内圧」の発信源にもなれるのだ。

ミスター・ガイアツのアマコストが永田町、霞が関を闊歩していた「gaiatsu (外圧)」の時代は過ぎ去った。今後、グリーンのような存在が増え続ければ、日米関係は、大衆の目には見えない「naiatsu (内圧)」の時代に移行しつつあるとも言える。

意識改革のベクトルの方向

「小泉退陣劇・有終の美」の第一幕を飾った今回の訪米。そこからは、グレースランドでの小泉プレスリーの姿に凝縮され、5年余にわたって日米関係を律してきた「小泉・ブッシュ蜜月体制」の本質が垣間見えた。日米のメディアは、テレビを中心に「社交外交」の側面ばかりに焦点を当てたが、その陰に隠れるように進行する「日米同盟」の深化にこそ、注目する必要があった。

9・11米同時多発テロを機に重要な転換点に立った日米両国が、新たな次元の「同盟」へと大きく舵を切ったのが01年。今回の訪米は「小泉・ブッシュ」体制下の総仕上げを意味した。小泉政権5年余の日米関係の総括、そして両国が向かうべき同盟の方向性を示したのが、両首脳の会談後に発表された共同文書「新世紀の日米同盟」だったが、小泉プレスリーのパフォーマンスによって、その真の意味合いを熟慮する機会はおかき消された。

テレビの影響力を意識した政治の仕掛けとパフォーマンス。テレポリティックスの効用を熟知し尽くしている小泉ならではの、自然体の政治



89年5月、スーパー301条発動でアマコスト駐米大使(左)に遺憾の意を伝える宇野外相(右)
(両首きは当時)

的アクション。案の定、日米双方のテレビメディアが小泉プレスリーのパフォーマンスに飛びつき、今回の首脳外交の真の意味を包み隠してしまった。小泉プレスリーの報道が偏重された分、一般大衆の目を曇らせてしまったと言える。

7月3日夕、恒例のぶら下がりインタビューに、首相・小泉は、人を食ったように答えている。

記者団 日米首脳会談が行われたが、米メディアが「首相はプレスリーのファンだ」ということばかり報道していたが、感想は。

小泉 日本のメディアと似ているんじゃないですか。政治のね、まともな話は報道しないで、やっぱりみんな、関心を持っているものを報道しようという。ある面では日本と似てますね。

記者団 プレスリーのことばかり報道されたことは不満か。

小泉 全然……。いいですよ。

今回の小泉訪米によって印象的だったものと言えば、ユーモアのセンスに富んだ小泉の「社交外交」の巧みさと、それが米メディアにも十分通用する国際的なレベルにあることだった。が、本来なら、国家安全保障上の論議の対象になるべき「新世紀の日米同盟」の総体としての意義を問う、突っ込んだ議論はなされていない。

安保面では、システム面の変革を先行させ、「融合・一体化」に不可欠な意識変革へと誘っていく方向が打ち出された。この分野では、共通戦略目標を既に設定しており、ベクトルの向きが変わることはないだろう。

経済面では、日米どちらの文化が核になるかは別として、ビジネス文化の融合が本格的に始まっている。が、政治の分野は事情が複雑だ。留学組など米国体験者が急増した日本政界では、米国への親近感は強まる一方で、独自の文化に根差すローカリズムの存在が、そう易々と「融合」への道を開かせないためだ。しかし、中長期的には、グリーンに象徴される政治レベルでの「意識融合」に向けた動きは、〈小泉改革〉で開いた風穴を突破口として、ますます「内圧」となって現れてくるだろう。



マイケル・アマコスト

米ブルッキングス研究所所長。1937 - 駐日大使時代、「ミスター外庄」として知られた。米コロンビア大博士課程卒。68年、国際基督教大の客員教授として来日。72年、インガソル駐日大使の特別補佐官に就任。一員してアジア外交に携わり、金大中事件、フィリピンのアキノ革命でも重要な役割を果たした。湾岸戦争に際して、日本の自衛隊派遣など大胆な国際貢献を迫り、日米構造協議では大規模公共投資や各種規制の緩和を求めた。89年～93年まで駐日大使に。

ミスター外庄



E・キース・ヘンリー

アジアストラテジー研究所代表。1984年～85年国際基督教大学 (ICU) 大学院研究生として公共政策について研究。88年に上智大学大学院 (国際ビジネス・プログラム) を卒業。現在は、上智大学大学院で講師を務め、経営管理と企業戦略を教える。84年～89年、永田町と霞ヶ関で国会議員の政策顧問および調査部門スタッフを務める。この間、防衛庁長官および環境庁長官の秘書としても実務に関わる。94年～2001年、マサチューセッツ工科大学 (MIT) 国際問題研究所のMITジャパン・プログラム調査アナリストを務めた。

「gaiatsuは不要」

【グレースランド】

外交 Keyword

「ロックンロールの帝王」と呼ばれた故エルビス・プレスリーの邸宅「グレースランド」が2006年3月27日、ホワイトハウスなどと並ぶ固定史跡に指定された。

「ロックンロールの帝王」と呼ばれた故エルビス・プレスリーの邸宅「グレースランド」が2006年3月27日、ホワイトハウスなどと並ぶ固定史跡に指定された。

エルビスは1957年、最初の大ヒット曲「ハートブレイク・ホテル」の収益で、故郷に近いテネシー州メンフィスに邸宅を購入。大成功を取った後もロサンゼルスなどに移住せず、77年に42歳の若さで亡くなるまでグレースランドに住み

続けた。遺体は邸宅内に埋葬されている。史跡指定したノートン内務長官は「伝説的なこの歌手の功績を後世に20世紀は語れない」とたたえた。エルビスのレコードは世界中で10億枚以上売れたと推定され、邸宅はファンの聖地として、年間60万人以上が訪れている。邸宅を含む広大な敷地は一般公開され、エルビスがゴスペル音楽を聴いた居間や自家用機、母親に贈ったピンク色の高級車キャデラックなども見学できる。

(M・グリーン プロフィールは25頁参照)